

# メディカルスタッフからの投稿 看護の立場から

長田 恵子<sup>†</sup>第68回国立病院総合医学会  
(平成26年11月14日 於横浜)

IRYO Vol. 70 No. 4 (196-198) 2016

## 要旨

医療のここ2年間の投稿実績をみると、総説6題、原著論文12題、報告32題であった。投稿者の職種内訳は、総説は6題とも医師。原著論文は医師5題で薬剤師・管理栄養士・臨床検査技師がそれぞれ2題ずつ、理学療法士が1題。報告は、医師が15題、薬剤師が6題、管理栄養士・臨床検査技師・心理療法士・放射線技師がそれぞれ2題ずつ、看護師・理学療法士・臨床工学技士がそれぞれ1題ずつの投稿であった。総説はともかくとして、原著・報告の半数以上はメディカルスタッフからの投稿であり、多職種からの医療をとらえた学会誌として特徴を示している。

しかし、職員数の数の大きさからすると看護からの投稿は少ない。一般的にも専門分野の研究報告は多いが、日常の看護実践からの「気づき」を研究につなげる、研究成果を活かす、研究を重ねるといったことは少ないと感じる。原因として考えられることは、看護は現象学的な要素が強く、数値に示すことのむずかしさがある。さらに、看護の実践は患者ごとの個別性が強く、一般化ができにくい面がある。研究者育成に時間的な制約や支援体制の不十分さも影響していることもいわれている。ただ、一般化ができにくいものでも、意義があれば発信して多くの人の目に触れ、類似性のある症例を集め報告をすることはできる。先行研究にないオリジナリティーの発信は、多くの人の視野の広がりや新たな研究の取り組みにつながる。論文作成は、看護実践の有効性やエビデンスを客観的に説明する機会ともなり、チーム医療の中で、他職種と互いの役割の理解の深まりにつなげることができる。そのためにも研究に取り組む機会づくり、継続的な研究支援、投稿の働きかけが必要である。

キーワード 看護実践, 研究, 一般化, 症例, 支援体制

国立病院機構災害医療センター 看護部 <sup>†</sup>看護師

著者連絡先：長田恵子 国立病院機構災害医療センター 看護部 〒190-0041 東京都立川市緑町3256

e-mail: k.osada@tdmc.hosp.go.jp

(平成27年2月13日受付, 平成28年2月12日受理)

Medical Staff Contribution to the "Iryo": From the Perspective of a Nurse

Keiko Osada, National Disaster Medical Center, Nurse

(Received Feb. 13, 2015, Accepted Feb. 12, 2016)

Key Words: nursing practice, research, generalization, case, support system

## はじめに

「医療」の投稿実績をみると、原著・報告の半数以上はメディカルスタッフからの投稿であり、多職種からの医療をとらえた学会誌として特徴的である。しかし、職員数の数の大きさからすると看護からの投稿は少ない。一般的にも専門分野の研究報告は多いが、日常の看護実践からの「気づき」を研究につなげる、研究成果を活かす、研究を重ねるといったことは少ないと感じる。原因として看護の実践は、数値に示すことのむずかしさ、患者ごとの個性が強くて一般化ができていく面が考えられる。研究者育成に時間的な制約や支援体制の不十分さも影響しているともいわれている。

今回、研究報告が少ない原因を分析し、その対策として災害医療センターでの研究支援の取り組みから看護管理者の役割について検討した。

### 看護研究の取り組みが少ない原因

投稿すなわち研究取り組みが少ない原因について、1点目、看護の実践は個性が強くて一般化がむずかしく研究として表現しにくいことがあげられる。であれば一つひとつの症例を丁寧に分析し、研究の題材に気づき研究につなげる、研究を重ねていくということをしていけばよいのだがなかなかそうはなっていない。臨床の現場では患者が示すさまざまな反応にとにかく対策することにとらわれて、「なぜ」とか「何がどのように効果があるか」考えを深められていないと感じる。看護の基礎教育でも臨床に出てからも研究を学ぶ機会は少なく基礎力がついていないこと、指導者も育てていないことの影響も大きい。看護管理者が臨床の場で研究の思考過程そのものを教育していく重要性を強く感じる。

2点目、研究の継続性という点で職業継続の困難さが影響すると考える。若林の研究では女性が仕事を継続するには本人の意志力とことに職場の支援に大きく影響される<sup>1)</sup>、また男女を問わず職務内容の連続性と発展性に基づくキャリアのタイプでは、研修生や実習生・見習いとしての仕事において連続性が低く、ここでも本人の意志と職場の支援が影響する<sup>2)</sup>と報告されている。研修生・実習生からの成長では看護職のキャリアの段階があてはまる。研究は積み重ねや継続的取り組みが必要である。職業継続のための環境整備はもとより、研究継続を支援する

はたらきかけが必要である。

3点目は、研究が職務ストレスとなっていることである。佐野らの報告では、中堅看護師の役割負担のひとつとして看護研究の取り組みを挙げている。研究の実施が個人の動機によるものでなく、業務上の役割になっているという現状がある<sup>3)</sup>。内的に動機づけできるように日常と結びつけた研究の取り組みを働きかける必要がある。

以上の3点から当院での取り組みについて報告する。

### 災害医療センター院内教育2年目 研修プログラム：看護過程の展開発表会

この研修は看護実践が患者にとってどのような効果をもたらすことができたのかを発表する症例報告会である。発表会は看護活動を説明する場、可視化する場として活用し、患者満足や自己の達成感から次の症例への取り組みや研究を重ねていく動機づけにし、研究ストレスのような役割負担のイメージを払拭しようとしている。

今年度の発表で、脳卒中で急性期を脱し、気管切開のある頸部の拘縮や筋緊張があった患者で、経口摂取を進めていくことを目標に掲げていた一例を紹介する。全身のリラクゼーションをはかり、体操の実施と体位の工夫を行い、座位を保持する訓練も進み目標到達に至った。この積極的で継続的な取り組みが大変素晴らしいと感心したのであるが、発表者もそのチームもたまたま効果が出ただけと実践を評価しようとしなかった。このような看護師の自己評価の低さは少なくない。研究への働きかけとしても、看護管理者が看護実践の評価をしっかりと伝える必要性を感じる。看護師のモチベーションを上げるという意味では、看護師長・副看護師長が投票で優秀者を推薦し看護部長表彰を実施している。

また、発表後にディスカッションし他者の意見を聞く、さらに自分の考えを深めていくことが重要で、この思考過程を日常の場面で繰り返し、自然に症例報告・研究の取り組みにつながるように看護師長・副看護師長へ働きかけている。

### 時間確保と研究指導

当院では看護研究取り組み1テーマにつき2年間の時間を確保し、その間継続してすすめていけるよ

うに指導の体制を工夫している。大学教員による研究指導で体系的に学び、倫理的な内容や研究計画等の細かい部分での指導を看護部倫理委員会で行う。看護部倫理委員会では 1. 研究方法に具体的な研究行動を述べる 2. 調査にオリジナル尺度を用いる場合の妥当性の検証について 3. 期待しない結果についてなぜそうなったのかを考察する 4. 検定結果や図表の提示方法 5. 統計分析ではひとつの結果で研究の全体を決定付けない、偏った判断をしない 6. 考察では証明されなかったことを傾向があると飛躍しない 7. 先行研究のクリティーク\*, 先行研究との比較・知見の考察を述べる等の項目が多く、自己の考えを論理的にまとめるところまで支援する必要もある。ほとんどの研究はまだ研究前の段階であり、研究として成り立っているものは少ない。そこから研究の始まりであることが多く、積み重ねて継続できるように支援体制を整える必要がある。

---

### 現場の取り組みを発信しよう

---

当院では「緊急輸血実施のためのシミュレーション」を診療部・検査部・看護部合同で行った。救命救急センターでは重症患者受け入れ時に緊急輸血ならびに異型輸血の実施の可能性がある。安全な実践にそなえるために、マニュアルにそって各部門が役割に応じた行動がとれるのかシナリオを作成し実施評価した。取り組みの結果からマニュアルに基づいたイメージトレーニングの重要性、他職種の動きを認識した行動、緊急対応における共通認識の重要性を導き出した。各施設の実践の場でさまざまに工夫し取り組んでいることがあると思われる。ぜひ「医療」に報告しあって共有したい。

---

### ま と め

---

「医療」は多職種の研究報告の集録になっており特徴的である。学術的に多職種が互いに情報を得、意見交換を行える共通の場があることは、チーム医療の推進、エビデンスの構築、医療質の向上に活かすことができる。看護部門からの投稿を増やすことは、看護の実践を可視化でき職種間の共通理解や連携につながる。そのためには看護管理者が、日常の実践の中から研究への「気づき」に働きかける、研究の時間確保、継続性の支援、計画書の支援、意義ある実践を評価し、発信する働きかけをしていくことが必要と考える。

〈本論文は第68回国立病院総合医学会シンポジウム「医療系論文の書き方と注意点 - 「医療」に投稿して世の中に発信しよう-」において「メディカルスタッフからの投稿 - 看護の立場から - 」として発表した内容に加筆したものである。〉

**著者の利益相反：**本論文発表内容に関連して申告なし。

---

#### [文献]

- 1) 若林満. 女性キャリア発達の構造. 労務研究 1985 ; 38(7) : 19-30.
- 2) 若林満. 組織内キャリア発達とその環境. 経営行動科学 2006 ; 19(2) : 77-108.
- 3) 佐野明美, 平井さよ子, 山口桂子. 中堅看護師の仕事意欲に関する調査 役割ストレス認知およびその他関連要因との分析. 日看研会誌 2006 ; 29 : 81-93.

---

\*クリティーク：研究論文に書かれていることを正しく読み解き、評価すること